

巻 頭 言

日本版 NIH の「精神疾患研究」推進と精神医学研究

岩田 仲生 日本精神神経学会理事
Nakao Iwata

日本版 NIH の概要が明らかになる中、具体的な達成目標として2020年頃に認知症・うつ病の根治薬の治験開始が掲げられている。認知症はさておき、うつ病の根治薬の開発を7年後には開始するというスピード感は、現場でうつ病研究に取り組んできた研究者にはやや唐突に覚える。一方でわが国の成長戦略産業として健康・医療分野を柱としたい安倍政権の後押しや、神経科学という切り口では日本は決して欧米に遅れを取っていないという評価から、敢えて中枢神経系の重要疾患の克服を目標としているとも見て取れる。精神医学研究、特に生物学的研究においては、欧米との格差は質量とも比較にならないほど立ち後れた状況にあるが、欧米での研究の最先端が「臨床実用」に近いかといえばそうでもなく、それを最終ゴールとすれば確かに日本と欧米との差は五十歩百歩であるともいえる。つまり本腰を入れ、かつ国家の威信をかけてこの領域を推進すれば追いつき追い抜ける可能性はある。

しかし、そのためには様々な課題が山積している。まず精神疾患研究に対する偏見を乗り越えなければならない。つまり「精神医学研究にみるべきものはない、そもそもレベルが低い、報告される内容も真理とかけ離れており再現性も乏しい、研究費を投入するだけ無駄ではないか」といった先入観である。確かにこれまで精神疾患に関して画期的な成果を得たとして公表されたものの多くは数年あるいは数ヵ月たつと振り返ることすらなく過ぎ去ってしまうことがほとんどである。もちろん画期的な治療法が実用化された例がないのも事実である。だからといって精神疾患研究を避けては、あるいはやってもわからないという不可知論に陥ってしまえば、何の前進も起こりえない。挑戦してこそフロンティアが開けるのであつ

て、まずはこの重しを取り払い研究開発に取り組んでいく舵取り役として本学会の責務は重大であると認識している。

次に、研究の担い手育成の課題がある。今わが国の若い精神科医の多くがこの「精神疾患研究推進」をどう捉えているのか。精神科以外の神経科学研究者はこの情勢に応じて精神疾患研究に大きな期待を寄せている。今までの方法論で迫ることができなかったヒトの行動様式としての精神症状・表現型に、ゲノム医科学・画像研究・光遺伝学・iPS細胞・霊長類モデル動物など近年開発された新たな研究手法で徐々に接近しつつある。しかし受け皿となる臨床研究施設において若い研究者にその可能性を存分に発揮してもらえる環境を供与できているとはとてもいえない。近年大学の臨床部門において採算性が厳しく問われるようになり、年々臨床業務の比重が重くなってきている。研究・教育・臨床の3つの業務を唯一担う大学医学部、特に研究においての大学の役割は代替が存在しないにもかかわらず、研究に注力する余力が果たして残っているのか深刻に検討し対策を打たなければ取り返しのつかない事態となりつつある。「米百俵」や「百年の計」を実行するのは今しかなく、その意味でも本学会の若手育成事業の重要性が増している。

研究環境整備や助成はもちろん、若手の研究者の育成、精神疾患の偏見を克服するための普及活動を継続的にすすめていくことなど、あらゆる方面での取組をそれぞれの持ち場で、この精神医学研究推進の時期を今生きている私たちが何をなすべきか、そしてその先に私たちが何をなしてどういう地点に立っているのか、今厳しく問われているのではないか。